



子育てで仕事断念…会社にも社会にも損失

ベンチャーが 社内に育児室



たび寅の本社で、女性社員と打ち合わせをする秋山さん(右から2人目)。働く女性に優しい会社を目指す

諏訪の「たび寅」社長出産を機に

ホテル・旅館向けのホームページ制作を手掛ける諏訪市沖田町のベンチャー企業「たび寅」は、7月にも社内に育児室を設ける。社長の秋山昂平さん(39)が初めての出産を間近に控え、若い女性社員も多いことから、仕事と育児を両立しやすい環境を整える。社内育児室を設ける中小企業は県内でも珍しく、「働く女性に優しい」会社づくりを競争力の向上にもつなげようと考えている。

来月にも設置 働く女性に優しい会社へ

たび寅は、人材・情報サービス大手のリクルート(東京)が発行する旅行雑誌「じゃらん」で働いていた秋山さんが2004年に設立。予約システム付きのホームページ制作をはじめ、旅館・ホテル側に料理や料金体系、宿泊プランまで提案する総合コンサルタント業務で業績を伸ばしている。社員11人のうち6人が女性で、いずれも20〜30代。会社の設立前に結婚した秋山さんはこれまで、一線社員と同じように県内外の得意先を飛び回る日々で、子どもは欲しかったが出産に踏み切らずにいたといい、40代を前に「きりぎり

つてもらおうと社内育児室の開設を決めた。現在、育児タツフを募集している。

「社員の育成には時間がかかる。働き続けたい女性が出産のために辞めるのは会社にも社会にも損失」と指摘する秋山さん。開設の狙いを「産休・育休で1年も休むと復帰が難しくなる。社内に育児室があれば仕事の合間も授乳でき、育休を取らずに仕事を続けられる」と説明する。

県ごども・家庭課によると、諏訪地方で把握している事業所内の保育施設は8カ所ある。うち5カ所は、夜勤が多い女性看護師向けの病院内施設。民間企業には人材を引き留める有効な手段ながら、新たな人件費など出費を強いられるためこの足を踏む場合が少なくないようだ。

諏訪地方では他に、フィギュア(人形)などを製造するピーエムオフィスエー(諏訪市沖田町)が、現社屋を建てた2006年から社内に育児室を設けている。乳幼児用のベッドもある部屋で、社員に子どもの面倒を見ながら仕事をしてもらう。社長の山口晃さん(44)は「設計に女性社員が多く、フランクなことで働き続けてもらうために環境を整えた。防音扉などを整える費用はかかったが、女性が定着する利点の方が大きい」と話している。